近代文学研究叢書

昭 和 女 子 大 学

近代文化研究所

近代文学研究叢書

第七十五巻

平成11年11月15日　初版印刷発行

著者　昭和女子大学近代文学研究室

発行者　井手　重昭

印刷所　大文堂印刷株式会社

発行所　昭和女子大学近代文化研究所
東京都世田谷区太子堂一―七
電話03（三四一一）五一二九番
振替口座〇〇一四〇―三―一七〇八六七

ISBN 4-7862-0075-1　C3091
価格はケースに表示してあります

目次

口絵
『近代文学研究叢書』の成立……二
凡例……五
加藤道夫……七
岸田國士……一〇五
吉澤義則……二六九
太田水穂……三九七
登張竹風……五八三
巻末付記……六八六
七十四巻年表補遺……六八九
PROFILES……七一六
索引……七四〇

『近代文学研究叢書』の成立

『近代文学研究叢書』は昭和三十一年一月、昭和女子大学光葉会からその第一巻が発行された。以来、明治期全十二冊、大正期全十三冊、昭和期が本巻を加えて五十冊を刊行、続刊中である。

本叢書は、創立者人見圓吉（東明）が建学の精神に基づき優れた研究者の養成を目的とし、これによって文学日本の近代相がいささかでも究明出来ればという強い願望により創められたもので、本学学生による近世の国文学者、洋学者についての研究調査をまとめた『文学遺跡巡礼』（昭和十三年十月、第一輯発行）が母胎となっている。

昭和二十年、戦争も末期に近づいた四月の大空襲により、本学は校舎とともに蔵書と未発表原稿の一切を焼失した。青年時代、三木露風、野口雨情らとともに早稲田詩社をおこして活躍したかつての詩人東明は、この時から明治の詩書をはじめ近代文学関係の文学書の蒐集にとりかかり、現在の近代文庫の基礎が固められた。神田の古書展では「文学書の値をつり上げる」という評判が立つほどの蒐集ぶりで、こうして蒐められた典籍をもとに近代の文学者、思想家約八百名の伝記、業績に関する資料文献の膨大なカードの作成には日本文学科の学生が総動員され、『近代文学研究叢書』の基礎的資料の基盤が築かれたのである。なお、母胎となった『文学遺跡巡礼』はその名の示す通り、生涯と業績に加えて遺跡の実地踏査、遺族の訪問記を特色としたが、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

本叢書はこの特色をそのまま踏襲している。すなわち、文学者の遺族を訪ね墓所や遺跡を踏査することによって、業績を含めたその全体像を闡明しようとするものである。また、著作と資料に関する年表調査も平行的になされ、網羅的な資料蒐集に意を注いでいる。業績については各専門分野における学界の権威に指導を仰ぎ、特に、発足当時の基礎固めには月曜会（学内における近代文学の研究会）での研鑽が大きな支えとなった。

第一巻では明治三年二月歿のB・J・ベッテルハイム、八田知紀、S・R・ブラウン、J・R・ブラック、成島柳北、森有礼、新島襄、佐佐木弘綱、中村正直ら九名が収められ、以後歿年順に収録された文学者、思想家はこれまでに三百八十九名を数え、本巻を以て通巻七十五冊に及んでいる。その間、第六巻発刊の昭和三十三年に本叢書は菊池寛賞を受賞している。

なお、創刊当初から監修者として叢書の全般にわたりご指導、ご助言をいただいた方ですでに物故された諸先生を左に記して感謝の意を表したい。

秋庭　太郎（演劇学）　池田　亀鑑（国文学）　石田　吉貞（国文学）
石津　純道（国文学）　石森　延男（児童文学）　上井　磯吉（英文学）
上野　景福（英語学）　岡　保生（近代文学）　太田　三郎（比較文学）
荻原井泉水（俳文学）　片桐　顕智（和歌文学）　金子　健二（英文学）
金子　武雄（国文学）　河鰭　実英（歴史学）　木俣　修（和歌文学）

木村　毅（比較文学）　斎藤　一寛（仏文学）　佐伯　梅友（文法学）
坂本由五郎（英文学）　佐々木八郎（国文学）　笹沢　美明（独文学）
佐藤　幹二（国文学）　山宮　允（英文学）　島田　謹二（比較文学）
玉井　幸助（国文学）　辻村　鑑（英文学）　内藤　濯（仏文学）
中林　謙二（英文学）　成瀬　正勝（近代文学）　能勢　頼賢（国語学）
浜　徳太郎（美　学）　人見　圓吉（近代文学）　本間　久雄（近代文学）
宮内　秀雄（英語学）　矢野　峰人（英文学）　吉田　澄夫（国語学）

本巻には、劇作家・俳優加藤道夫（大正七年十月十七日～昭和二十八年十二月二十二日）、劇作家岸田國士（明治二十三年十一月二日～昭和二十九年三月五日）、国文学者・歌人吉澤義則（明治九年八月二十二日～昭和二十九年十一月五日）、歌人太田水穂（明治九年十二月九日～昭和三十年一月一日）、ドイツ文学者・評論家登張竹風（明治六年十月二日～昭和三十年一月六日）の五名の研究調査を収めた。

凡例

一　著作年表は、発表が生前と死後とを問わずその作者の作品のすべてを収め、資料年表は、第三者の考説、評論、感想等の文献を収めた。単行本の中での編集物は、所要の小題を書題名欄に、書名と発行所を誌紙名欄に、小題の執筆者を筆者欄に掲げ筆名、筆者名は掲載誌紙の表記にしたがった。

二　年表記載で、調査者が直接あたれなかった項目については☆印を付した。

三　各稿の末尾に「採訪」と「参考文献」を掲げたのは、研究調査の際に訪問して教示を仰ぎ、便宜を与えられた方々に感謝の意を表し、また、資料の出所、起稿や修訂にあたって参考にした文献の依拠を明らかにするためのもので、「参考文献」は資料年表と一部重複することがある。

四　表記はすべて現代仮名遣い、常用漢字を用いた。但し、人名は、各研究対象者に限り旧漢字で表記した。

五　引用文の表記は仮名遣いは原文にしたがい漢字は常用漢字を用いた。外国文の場合は訳文または大意を添付する。なお原文中の誤りや疑わしい箇所の右側に（ママ）と記した。

六　年代は日本年号と西暦とで適宜表記し、どちらからでも検索できるようにした。年齢は満年齢を用いた。

加藤道夫

大正七年（一九一八）十月十七日生
昭和二十八年（一九五三）十二月二十二日歿

一　生　涯

イ　幼少年時代

加藤道夫は大正七年（一九一八）十月十七日に父加藤武夫、母かつの三男として、福岡県遠賀郡戸畑町（現、北九州市戸畑区）に生まれた。兄二人と姉二人があり、道夫のあとに弟と妹が生まれたが妹は夭折した。父は明治十六年に神奈川県に生まれ、四十年に東京帝国大学理学部地質学科を卒業した。道夫誕生の頃には明治専門学校で教授として教鞭を執っていたが、大正十年に母校の地質学科に教授として招聘され、一家を挙げて上京、世田谷区上馬一丁目六二二番地に居を構えた。著名な地質学者で、後に東京帝国大学の理学部長を経て名誉教授となった人物である。道夫の兄弟たちも後に国立大学の理科系に進む学者一家であった。

大正十四年に道夫は駒沢尋常高等小学校に入学した。「僕は、幼少の頃から引込思案で、意気地なしで、大変な恥しがり屋で、人前に出ると忽ち顔面紅潮する、といった病的な神経質であった。」（「僕の演劇遍路」会館芸術昭27・11　未見、「加藤道夫全集2」（以下「全集2」と記す）昭58・4収録）と回想するように、生まれながらに内向的で繊細な性格の持ち主であった。彼はこの「異常な神経質の故」（僕の演劇遍路）に、やがて仮想の現実のなかに身を置くことに喜びを見出すようになる。「幼少の頃、僕はよく庭の片隅でひとり芝居をしたものだ。劇的空想の中

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

に自分を置いて一時間も二時間も、時の経つのも忘れて独白劇を演じているところを家の者によく盗み聴きされて笑われたものである。」（僕の演劇遍路）そしてこの幼児体験が、俳優という職業への直接的な憧れと結びつく機会は意外に早く訪れた。両親はプロテスタントで道夫も幼い頃からメソジスト教会の日曜学校に通っていたが、小学校三年生の頃クリスマスの祝祭劇で羊飼いの役を振り当てられ、舞台に立ったことが、「生れて初めての爽やかな生の意識を眼覚めさせてくれたようである。」（僕の演劇遍路）と彼は語っている。

昭和六年三月に尋常高等小学校を卒業した道夫は、自伝的小説「銀杏の家」（慶応義塾予科会誌　昭14・2）で主人公の語る「僕は先づ府立へ這入つてそれから高等学校・大学を出て官吏になります」という台詞がどれほど事実に即したものかはわからないが、翌四月に東京府立第五中学校（現、小石川高等学校）に入学した。同級生には原田義人、菊池章一らがいた。語学には早くから優れた才能を示した。映画が好きで昭和十年の夏休みには「映画入門」という手作りの本（日本近代文学館蔵）を作っている。同十年には五年生C組のクラス誌として発行された「東雲」に「夢」（二号、未見）を執筆したのを手始めに、翌十一年にも「たはこと」（四号）、「『犬』『子供の心』そして『感激』」及び「『時計と支那そば』」（五号、未見）、「蚊取線香のけむ」（六号）などを次々と発表、創作への関心が次第にかたちを成していく様が窺える。内向的な性格は相変わらずで、親友の原田は、「人を避けるような姿勢をとり、眼を伏せ、なにかおびえているような顔貌をした彼の姿」や「校内の階段ですれちがつても、眼を伏せるような内気な性格」（「加藤道夫」　加藤道夫全集　附録　昭30・10）であったこの頃の加藤の様子を書きとめている。

一家はこの間に世田谷区若林町二三七番地（現、若林三丁目十五番地一号）の広壮な邸宅に移り住んだ。ここはもともと福岡県出身の貴族院議員吉原正隆の屋敷で、正隆の死後、北原白秋が同郷の誼で留守居を兼ねて安く借り受け、昭和三年四月から六年初夏にかけて住んだ場所であった。

ロ　学生時代

昭和十一年三月に府立第五中学校を卒業した加藤は、第一高等学校を受験して失敗し、翌十二年四月に慶応義塾大学予科に入学した。専攻は法科で、担任教授は奥野信太郎であった。男の子は官立大学の理科系に進むという加藤家の習わしからすれば、法科への進学はそれだけでも異色なことであったが、すでにこの時、加藤の心中では文学への嗜好が芽生えていたらしい。中学校時代の友人たちと翌十三年の八号まで「東雲」を続刊し、この年には、予科の神山四郎、梅田晴夫、八田徳治らの同人雑誌「素描」に参加、シネ・ポエム風のシナリオ「七面鳥と或る男の悲劇」（未見）を執筆した。

また予科入学と同時に英語会に入ったことが、やがて彼の将来を決めることとなった。加藤の英語劇の初舞台は、記録された限りでは昭和十三年六月に九段の軍人会館で行われた、第九回四大学英語劇大会（立教、東京商大、慶応、早稲田参加）の舞台で、フレミング（Brand Fleming）作、「メッセージ」だと源高根は指摘している。（「加藤道夫の習作時代」帝塚山学院短期大学研究年報　昭36・11）さらに加藤は、予科のフランス語教師大久保洋海が主宰する銀座フランス語研究会にも通ってフランス語の習得にも励んだ。進むべき道をまだ模索していた時代で、翌十四

年二月には、自伝的小説「銀杏の家」（慶応義塾予科会誌）を発表して「深さと力にみちた作品」（「創作」慶応義塾予科会誌　昭14・2）と阿部知二に推奨された。八田の紹介で芥川比呂志を知り急速に親しくなったのも同じく二月、文学座のマルセル・パニョル原作「マリウス」を飛行館に観に出かけたときのことで、まさに運命の出会いであった。フランス演劇とともにアメリカ演劇にも強い関心を抱き、懇意の書店を通じてアメリカ戯曲の新作や新しい演劇論を手に入れてはこれを読み、アメリカ現代劇論を纏めることを計画していたが、やがて戦争によって中断された。

昭和十五年三月に予科を卒業した加藤は、四月に慶応義塾大学英吉利文学科に入学した。前年の「銀杏の家」につづいて書いた「或る残酷なる物語（フット）」は石坂洋次郎の選を受けて「慶応ペン」（昭15・6　未見、「加藤道夫全集1」（以下「全集1」と記す）昭58・3収録）に掲載され、多才ぶりを示した。同じ号にはアーサー・シモンズ作「思ひ出」、「月の出」の訳詩も掲載され、当時フランス象徴派詩人に傾倒していた加藤の一面を窺わせる。さらに六月には第十一回英語劇大会でチェーホフ原作の「披露宴」で火災保険の代理店員ニューニンの役を演じた。「英語青年」の「片々録」（昭15・7・15）は熱演した十二人の役者のなかで特に加藤も含めた三人の演技に着目しており、俳優としての加藤の評価もまずまずであった。片や語学の才能を発揮して、七月には津田英学塾で開催された第七回日米学生会議に大学代表の一人として参加、「芸術と人生」討論グループの議長として活躍した。

十五年九月、慶応義塾仏蘭西演劇研究会の第一回発表会で、芥川比呂志演出によるシャルル・ヴィルドラッ

ク作「商船テナシティ」のフランス語公演が行われ、加藤もイドゥ役で好評を博した。上演に先立って夏には芥川らと北軽井沢の南紀美術クラブに合宿し、近くの山荘に滞在する岸田国士のもとを訪ねた。この劇の上演が芥川と加藤のふたりを演劇の実際的な活動に結びつけたと言える。堀田善衛、白井浩司を知ったのもこの年のことである。昭和十六年四月に、加藤は芥川比呂志、鳴海弘（四郎）、原田義人、鬼頭哲人らとともに研究劇団「新演劇研究会」を結成、日比谷の松本楼で発会の集いをもった。多くの大学から、演劇の状況に飽き足りない学生たちが集まってきたが、芥川はこの時のことを次のように記している。「ほとんど全部の会員が、彼の力であつまつたといつても、云ひすぎではない。加藤は、寛容とか、あたたかい人柄とか、さういふ表現では間にあはぬ一種のふしぎな『親和力』をもつてゐた。実際、時には自分でそれをもてあますほどに、もつてゐたのである。」（「『なよたけ』の頃」現代日本戯曲選集11附録　月報6　昭30・8）と。たしかに当時の加藤の人望と演劇に賭ける情熱や行動力は瞠目すべきものであったらしく、原田義人もまた中学を卒業して四、五年後に加藤から新演劇研究会への誘いを受けたときの驚きを後に語っている。「彼の変貌と成長とに驚かされたのであつた。彼は潑剌とし、諧謔を好み、活動的であつた。」（加藤道夫）しかし、と原田は追想する。「今から思えば、加藤の心のなかには、終始、昔のままの孤独が巣くつていたのだつた。」（加藤道夫）さらにまた、同じ時期に芥川を介して加藤を知った中村真一郎は「学者と芸術家とが見事に同一人格のなかで調和している、という第一印象だった。」（「加藤道夫――四つの断章」文学座第63回公演　なよたけ　昭30・10）と書き記している。

のちに加藤夫人となる滝浪治子（東宝女優・御舟京子）もまた新演劇研究会に参集した一人であった。新しい演

劇のあり方を模索する彼等は、フランス戯曲をはじめ岸田や森本薫の戯曲をもとに読書会や朗読会を行い、フランス映画を鑑賞し、能や文楽を観ることに若い情熱を注ぎ込んだ。稽古場は錦橋閣という貸席で、二階は文学座の稽古場であった。そして早くも十六年十一月には第一回発表会を築地小劇場改め国民新劇場で催すこととなった。上演演目は一幕劇の三本立てで、ポール・グリーン作、加藤道夫訳の「ろくでなし」、ソーントン・ワイルダーの『わが町』に発想を得て加藤が書き下ろした「十一月の夜——四つの挿話と幕間劇——」、ジュール・ロマン作、芥川比呂志訳の「カガヤキ号」であった。「カガヤキ号」では加藤も藤脇道郎の芸名でエスキメル氏の役を演じた。「戯曲の創作、翻訳から、演出、演技、装置、ポスター描きから切符の売り捌きまで、二人は大抵何でもやった。」（「若き劇作家の死—友人・加藤道夫—」芸術新潮　昭29・2）とは芥川の証言である。舞台の費用を捻出するために加藤は英仏独語の才能を生かして帝国ホテルで通訳のアルバイトに励んだという。

大学では折口信夫の講義に深く感銘を受けて私淑するようになり、一方西脇順三郎やジョン・モリスなどの指導でエリザベス朝演劇の研究に打ち込んだ。モリスはのちにロンドンBBCの極東課長となった人物で、加藤はモリスの演出する英語劇にもたびたび出演した。学業の傍ら映画関係の出版社でアルバイトをし、映画雑誌に記事を書いた。内村直也を知ったのはこの年である。

八　戦争前後

昭和十七年四月に兵役検査があり、加藤は第三乙、芥川は第二乙と認定された。「加藤の口惜しがること甚

し」と鳴海弘は新演劇研究会「当番日誌1」（『全集2』）に四月十四日付で書き記している。七月には新演劇研究会の第二回発表会を再び国民新劇場で行い、加藤の演出で阪中正夫作「田舎道」を上演し、加藤自身も牛を連れた老爺の役を好演した。もう一本は芥川演出によるモリエール作「亭主学校」であった。

この年十月に繰り上げ卒業となって芥川や原田らは入営し、残された加藤は大学院に進んでシェイクスピアやベン・ジョンソンなどの研究を続けた。因みに加藤の卒業論文の題名は“Ben Jonson and the Stage”であった。傍らアテネ・フランセに通ってフランス語の習得に努めながらヴァレリーやリルケ、ジロドゥー、クローデルなどのフランス文学に親しみ、能を鑑賞し、高津春繁についてギリシア語を学んだ。新演劇研究会の仲間たちが次々と出征し、新劇への弾圧も厳しさを増す中で、加藤は翌年春の第三回公演へ向けて準備を進めるが努力も空しく、研究会は十八年の年明け早々に自然休会となった。

十八年、加藤は陸軍省通訳官の試験を受けた。友人たちが次々と出征して行くときに、一人安泰な地に残されることへの後ろめたさからという、いかにも加藤らしい動機であった。任官を前にしてこの春から「なよたけ」の創作ノートを取り始めた加藤は、九月に折口信夫の『死者の書』が出版されると、ほとんど衝撃的とも言える啓示を受けた。「暗い『死』の季節の中で、折口先生の『死者の書』は特に僕の心をとらへた。あれは多分僕の青春を圧倒した唯一の日本の小説だらう。日本の小説に構想力と詩の貧困をかこつてゐた僕にとつて、『死者の書』の出現は何か沙漠の中のオアシスに似た救ひだつた」（『『死者の書』と共に』三田文学　昭28・11）と後に回想している。いよいよ「なよたけ」を起草したのは十八年秋のことであったが、「戦争が起らなかったら、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com